

徳川みらい学会第6回講演会

「西洋人の見た徳川日本」

静岡県立美術館館長・徳川みらい学会会長 芳賀 徹氏



徳川みらい学会の第6回講演会を1月10日(土)、静岡市民文化会館で開催しました。講師は静岡県立美術館館長で徳川みらい学会会長の芳賀徹氏。徳川時代に日本に渡来し、外からの眼で日本社会を観察し、記述した外国人旅行者たちの文章を読み解くことで徳川時代を再評価していただきました。

徳川日本を世界と比べる

外国人旅行者たちは、日本人が当たり前のこととして記録にも残さないでいる「徳川日本」の社会と自然の面白さや美しさ、不思議さを、自身の文明圏と比較し、鮮やかに描き残してくれました。ここでは、ドイツのケンペル(1651-1716)、スウェーデンのツンベルク(1743-1828)、イギリスのオールコック(1809-1897)の記述について紹介いたします。

鎖国肯定論のケンペル

5代将軍徳川綱吉の時代にやってきたケンペルは、『日本誌』で徳川

日本について、街並みや人間観察などを詳細に著しました。

例えば江戸の日本橋風景では、「歩いている者もいけば駕籠を使う人もいた。ヨーロッパ軍隊式の隊形をした約1000人の消防隊の行進にも出会った。彼らの制服は褐色の革の上着で、火事に都合のよい作りであった」という風に、日本の紀行文学には書かれないものが鮮明に書かれていました。それは鑑賞ではなく観察の旅行でした。

このケンペルが最後に評価したことは鎖国でした。初めは否定から入るのですが、日本が置かれている地理的環境や歴史をみると、鎖国することで国民の幸福や平和を築き上げていると結論づけました。明治期以降に強まったマイナスイメージの鎖国ですが、鎖国の時代に生き、観察したケンペルは鎖国を肯定的に捉えました。

勤勉で好奇心旺盛な国民性を感じたツンベルク

博物学者のツンベルクは、アフリカ

やインド、東南アジアを渡り、18世紀の徳川日本にやってきましたが、日本は他国と比べてまるで違い、平和で、民衆は豊かであることを感じます。特に農業が実に行き届いて発達していることに驚きました。

中川淳庵や桂川甫周といった蘭学者は西洋科学を学ぼうとツンベルクのもとに集まります。彼らはとても熱心で、ツンベルクは質問攻めに疲れきってしまうこともありましたが、その勤勉さや好奇心、礼儀正しさを高く評価しました。

西欧の対日外交の批判に転じるオールコック

イギリスの初代駐日全権公使として日本にやってきたオールコックは、攘夷派横行に辟易し、日本は野蛮国という偏見を持っていました。しかし日本各地を旅行し見聞を広めていくことで、日本には徳川の平和、「パクス・トクガワーナ」の豊かさが残っていることを知ります。そして強引に開国を迫る列強政府の外交に対し疑問を持つなど、だん



だんと考え方が変わり日本びいきになっていきました。

平和の時代に蓄積した知識や学問によって、幕府を中心とした武士たちが世界の中の日本のゆくえについて考えた結果が、明治時代への大転換だったのではないのでしょうか。明治維新は徳川日本の「パクス・トクガワーナ」が生んだ最後の見事な遺産であると私は考えています。



個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ〉 徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈HP〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)